

8 月第 3 週の礼拝説教

- 日 時：2024 年 8 月 18 日（日）10：30～11：30 聖霊降臨節第 14 主日礼拝
- 説 教： 保科けい子牧師
- 聖 書：新約：ヨハネによる福音書 8 章 3～11 節（P180～181）
- 説教題：「行きなさい。」
- 讃美歌：160（深い悩みより われはみ名を呼ぶ。）
481（救いの主イエスの とうとい愛は）

本日の聖書箇所は、ヨハネによる福音書8章3節から11節です。ところが、この「わたしもあなたを罪に定めない」という見出しのついた段落は、7章53節から書き出されており、この段落全体が亀甲括弧でくくられています。この亀甲括弧でくくられている箇所には意味があります。聖書を開いていただくと、まず最初に「序文」が置かれています。その次に「凡例」が置かれており、この聖書の編集方針などが箇条書きにされています。その(6)に亀甲括弧の説明が記されています。本日の箇所に該当する部分だけを読んで見ます。「新約聖書においては、後代の加筆とみられているが年代的に古く重要である箇所を示す。」とあります。ヨハネによる福音書に当てはめてみますと、もともとのヨハネによる福音書にはこの箇所が記されていなかったと考えられるのですが、この話がかかなり古くから伝えられていたことは確かで、5世紀頃からは、主イエスの姿を印象的に伝えている話として大切に読まれてきたと言われています。

さて、主イエスがエルサレムの神殿の境内で人々に教を語っておられるところに、律法学者やファリサイ派の人々が、姦通の現場で捕えられた女を連れてやってきました。現代の言葉で言えば、たぶん不倫の現場で捕えられた女を主イエスのところに連れてきたということになりましょう。ここで出てくる「律法学者」は、福音書の中では、「祭司長」「ファリサイ派の人々」などとセットで登場してきますのですが、ヨハネによる福音書の中では「律法学者」は本日の箇所8章3節にしか登場しておりません。それだけ、本日の箇所は、旧約聖書にある律法、特に「十戒」を意識しているように思われます。その第七の戒めは「姦淫してはならない」です。神さまがお与えになったこの戒めを破ることが罪になるわけです。「十戒」には「殺してはならない」「盗んではならない」などという定めもありますが、特に「姦淫」は当事者二人が石で打ち殺されなければならない罪とされていたのです。（レビ記20：10、申命記22：22～23、石打ちは23）その姦淫の現場で捕えられた女が連れて来られました。その現場には当然相手がいたはずですし、その男も同罪なのですが、女だけが主イエスのもとに連行されて来たのです。律法学者やファリサイ派の人々は主イエスに「こういう女は石で打ち殺せと、モーセは律法の中で命じています。ところで、あなたはどうかお考えになりますか」と尋ねました。それは「イエスを試して、訴える口実を得るために、こう言ったのである」と6節にあります。もし主イエスがこの女を赦せと言ったら、イエスという男は律法に反することを教えたユダヤ人の最高法院に訴えることができます。逆にイエスという男がこの女を石で打ち殺せと言ったら、ユダヤを支配しているローマ帝国の総督に、総督の許可なしに人を死刑にせよと言った、とこの男を訴える口実ができるのです。ですから、どのように答えてもイエスという男を陥れることができる、という状況を彼らは造り出してい

るのです。彼らの言葉を聞くと主イエスは、「かがみ込み、指で地面に何か書き始められた」とあります。こういう主イエスの姿が語られているのは、ヨハネによる福音書の中でも、あるいは広く福音書全体を見ても、この箇所以外にはありません。この場面は、私たちに様々な想像を抱かせます。しかし、深く考えてみると、彼らの言葉を聞いてかがみ込んだ主イエスの姿には、主イエスの悲しみが表れているように思われます。一人の女をさらしものにしてご自分を陥れようとしている人々の有様を深く嘆き、このような悪意に満ちた問いには答えたくないと背中で拒否しているとも受け止めることができます。さらに考えれば、ここには、人間の深い罪をその身に担って、その重荷におしつぶされそうになって屈み込んでおられる主イエスの姿があるのです。それはまさに、ヨハネによる福音書があらかじめ描いている主イエスの十字架の道行きにも見えてきます。

7節にまいりましょう。「しかし、彼らがしつこく問い続けるので、主イエスは身を起こして言われた、『あなたたちの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい』」と記されています。8節ではそれに続いて「そしてまた、身をかがめて地面に書き続けられた」とその場の静かな情景を描いています。ある方は、その状況を次のように語っています。「この一言は、人間の罪の重荷を背負っておられる主イエスが、その深い嘆き悲しみ苦しみの中からしぼり出すようにお語りなされた言葉です。その言葉は、騒ぎ立てている人々の心を深くえぐり、沈黙をもたらしました。律法学者やファリサイ派の人々は、罪人であるこの女を石で打ち殺すことこそが神に従う正しい信仰の行為だと信じており、そういう正義感に酔いしれています。自分は正しいことをしていると思っている時にこそ、人はいくらでも残酷になれるし、そこに喜びを感じるのです。さらにそれによって、律法を尊重せず神を冒とくしているイエスを葬り去ることができることとあって、ますますいきり立っているのです。また周りを取り囲んでいる群衆たちも、姦通の現場で捕えられた女を興味本位の卑猥な目で見つめながら、彼女を石で打ち殺すことで日頃のうっぶんを晴らそうとしています。あるいは、イエスがこの絶体絶命の状況の中で何を語るのだろうか、これも興味本位の傍観者の態度で眺めていた人もいたでしょう。そのように様々な思いを持ちつつ、彼らに共通しているのは、明らかに罪ある人間を糾弾するという誰も文句をつけようのない正しい行いによって残酷な喜びを満たそうとしている、ということです。しかしその全ての人々が、『あなたたちの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい』という主イエスの一言によって、はっとさせられたのです。自分自身を顧みることを迫られたのです。これを聞いて、『私が真っ先にこの女に石を投げる』と言った者は一人もいませんでした。罪を犯したことの無い者こそ真っ先に石を投げるのに相応しい。その通りだ。でもそれは自分ではない。自分も罪を犯したことがある。だから自分は真っ先には投げられない。誰かの後で、二番目か三番目か、あるいは十番目ぐらいには自分も投げるができる、そのように誰もが思ったのです。」私自身もまたこの場面に行ったら、自分自身の日頃の行いなどは棚に上げて、誰かの後で十一番目ぐらいには石を投げてよいのではないかと考えていたかもしれません。そのような沈黙の中で、「年長者から始まって、一人また一人と、立ち去ってしまい、イエスひとりと、真ん中にいた女が残った」と9節では記されています。年長者ほど、自分にも罪がある、自分はこの女に石を投げる資格などない、ということにより早く気づいたということです。私自身も既に年長者ですが、この箇所、年長者であるほど、自分の罪の深さにより深く気づいているはずだ、と聖書が語っている厳しさに打ちのめされる思いがいたします。

そのようにして、その場には誰もいなくなってしまう、主イエスと女だけになりました。主イエスは身を起こして「婦人よ、あの人たちはどこにいるのか。だれもあなたを罪に定めなかったのか」と語りかけました。「婦人よ」から始まる主イエスの女に対する呼びかけは、罪ある者に対する上から目線の言葉ではなく、一人の女性に対する尊厳をもっての呼びかけであると、私は受け止めています。それに対して女は、「主よ、だれも」と答えました。その場の女の気持ちをいろいろ想像しておられる方はたくさんいます。けれども私は、その女が人々の前にひきづりだされて、人々の真ん中に立たされてさらし者にされた後、おそらくはくずおれるようにして地面に這いつくばってしまった悲しみを思います。しかし、彼女はその地面の低さまで主イエスがかがみ込んで下さったことを自分自身の目を見た時に、そして、主イエスの言葉によって女に石を投げることができる者が一人もいなかった時に、本当の意味でひざまづくことができたのではないか、と思います。彼女は自分の罪を本当に裁くことができる方、自分を罪に定めることができるただ一人の方の前に、身を置くことが許されたのです。そして、かがみ込んでおられた主イエスが身を起こして女に「だれもあなたを罪に定めなかったのか」と問いかけられた時に、女も初めて目を上げて主イエスを見つめ、自分の言葉で「主よ、だれも」と答えることができたのではないか、と思います。

その主イエスは婦人に、「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない」と語られました。罪を犯している彼女を裁き、石を投げることのできるただ一人のまことの主であられるイエス・キリストが、「わたしもあなたを罪に定めない」と宣言してくださったのです。「行きなさい。」というみ言葉は、地面に倒れるように身を低くさせられていた女が、主イエスに向かって目を上げやっとな身を起こしたときに、彼女と同じ目線に立っておられた主イエスから語られた言葉であると思います。それは、たとえそれが彼女の置かれていた元の状況に帰っていくものであったにせよ、これまでの彼女の歩みへと戻るのではなく、今ここで新しい方向へと歩みを変えなさい、という励ましの言葉であるはずです。私たちもそれぞれに、決して他の人には語ることのできない様々な思いがあります。けれども、たとえそれが神様に背く罪であっても、私たちが深くうなだれ主イエスの前にひざまずいて告白するとき、「わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。これからは、もう罪を犯してはならない」という赦しの言葉を聞くのではないのでしょうか。そのために、今日も私たちは猛暑の中で教会に集い、「行きなさい。」というみ言葉に励まされて、新しい歩みへと押し出されていくのです。